

あまごひののりと
雨乞祝詞

かけまく かしこ そのおほかみ ひろまへ まうさ ことし はる はじめ
掛巻も畏き其大神の廣前に白く。今年春の始より
あまみづつき ふれれ あめのした おほんたから とりつく おうつ みとし
安麻美豆繼て降零ば、天下の公民の取作れる奥津御歳を
とよとし なしさきはひたま うれ よろこび このごろひでりひ
豊年に成幸給はんと嘉しみ悦しに、頃日炎旱日を
へ おほんたから たつくりたなつもの はじめ くさ かたは いた
經て、百姓の田作穀物の始、草の片葉に至るまで
かれ なえ ゆへ 今日 いくひ たるひ あさひ
枯し萎るが故に、今日の生日の足日の朝日の
とよさかのほり いやしる みてぐら ゆき みき みにえ よこやま ごと
豊榮登に、禮代の幣帛、由紀の御酒、御贄を横山の如く
おきたら ゆしり いじしり もちゆま はりきよま はり
置足はして、由志理伊都志理持齋麻波里清麻波利の
たいのりまう こと よし たいら やすら きこしめし たちまち あまつ み
祈禱申す事の由を平けく安けく聞食て、忽に天津御
そらた なくもり あまつ みづ こほす がごと ふり おほかみたち
空多奈雲入、天津美津古保須我如く降て、大神等の
しきま やまやま うち さく なだり くだしたま みづ
敷座す山山の口より狭久那多利に下給ふ水を、
あまみづ うつのみづ おほみ た うけ いつくさのたなつものあき たりほ やつらほ
甘水の美水と大御田に受て、五穀秋の垂穂八握穂
に佐加へしめ成幸給はば、初穂をば汁にも穎にも
や おしねちしね ひきすゑおき あき まつり どうみ け ながみ け
八百稻千稻に引居置て、秋の祭に遠御膳の長御膳と
あかに ほ かん かび きこしめ こと ほぎまつる よごと
赤丹の穂を神穎に聞食せと、言祝奉吉事を
うる ねづきすきを ろが み たたへごとをへまつる おそれ おそれ まう
頸根衝拔烏呂餓美て稱辭竟奉と恐み恐みも申す。

雨乞祝詞（現代語訳）

声に出して申し上げるのも恐れ多い大神の御神前にて謹んで申し上げます。今年の春の初めより、雨が少なく乾いた日が続き、雨が降らぬために、天下の民たちが丹精こめて耕し育てた田畑の作物が、どうか豊かな実りとなりますようにと、喜びと希望を持って過ごしてまいりましたが、このところ、日照りの日が続き、民の耕す田や畑の穀物はもちろんのこと、野の草木の一葉一葉にいたるまで、枯れてしおれてしまいました。そこで、今日という佳き日の朝日が昇る時に、感謝と願いを込めて、捧げものを整え、玉串・布帛・神酒や神饌を山のように取り揃え、身を清め心を澄ませて、祈り申し上げます。

どうかこの祈りの言葉を、穏やかに、静かに、受け止めお聞き入れいただき、速やかに、天の御空が雲に覆われ、天の清らかな水が霧や霰あられのように豊かに降り注ぎ、大神たちが鎮まります山々の峰々より、谷や川へと、豊かな水をお流しくださり、その甘露のような、清らかな水を田に受け止め、五穀豊穰となり、秋にはたわわに実った稲穂が、八束穂のごとくに、見事に実り栄えますならば、その初穂を、汁にもし、粥にも炊き、八百、千にも及ぶ稲の中より選び取り、秋の祭りの折には、遠くの御膳、長く続く御膳としてお供えし、赤く染まる稲穂を神聖なる捧げものとして差し上げたく存じます。

この喜びの願いをお受け取りいただき、吉兆のしるしを賜り、敬い称えるこの言葉を結びいたします。恐れながら、謹んで申し上げます。